



五日目の夕方、部屋にノックが響いた。

「スマレ、起きていますか？」

「……ああ、ちょうど目が覚めた」

「起こしてしまったならすみません」

「いいや、大丈夫。どうかした？」

「いえ……、どうしてるかなと思って。あ、開けてもいいですか？」

そうだ、僕たちはもう扉越しで話す必要はない。  
遠慮がちに扉を開けるマリーの手には、ろうそくがあった。

「こんばんは」

「こんばんは」

「わ、すごいですね。これ、全部スマレが描いた絵ですか？」

「うん」


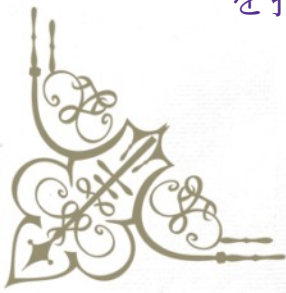
床に散らばっている絵を見て、マリーが言う。

「見てもいいですか？」

「おもしろいものじゃないと思うけど」

「そんなことはないですよ」

彼女は絵の前にしゃがみこみ、ひとつひとつ、眺めていく。  
窓から見える風景、作業の合間に描いた絵、この部屋の中  
を描いたもの、そして人物の絵。





じっくりと見られて、なんだか気恥ずかしい。

「素敵ですね……」

「そう、かな」

そんなことを言われたのは随分と久しぶりだ。  
つい顔を逸らしてしまった、と同時に、ぐうと彼女のお腹  
が鳴いた。

「……あの、聞かなかったことにしてください」

「それはいいけど、もしかしてなにも食べてないの？」

「はい……」

「珍しいね」

「すぐ作ります！」

恥ずかしいのか、マリーはそそくさと部屋を出ていこうと  
する。


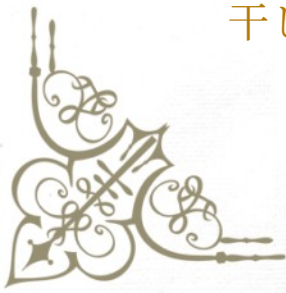
そして、扉の前で立ち止まり、こちらを見ずに言った。

「絵、見せてくれてありがとうございました」



どこか喜色<sup>きしよく</sup>を帯びた声音<sup>こわね</sup>だった。



恥ずかしさをかき消すために、急いで調理台に立った。  
干した肉を切った野菜と一緒に煮込む。







パンと果物を切って、いつもと代り映えしないメニューを机に並べた。

「スマレ。ご飯ができたのですが、よかったらこちらで食べませんか？」

「いいの？」

「もちろんです！」

開けっぱなしだった扉から、スマレが顔を出す。  
二人で向かい合って座り、ご飯を食べた。

「明日は僕が作ろうか」

「スマレってご飯作れるんですか？」

「小さいころは当番制だったからね」

「すごいです。絵も描けて料理もできるなんて」

「すごくないよ。どっちも適当にやっているだけだから」

「絵について詳しくないですが、適当であれほど素敵な絵は描けないですよ」

「詳しくないのに言い切るんだ」

「そのくらい素敵な絵なので！ それに、スマレはなんでも描くですね。風景だったり、人だったり。あの絵にモデルはいるんですか？」

「ああ、あの子は僕の——親友だよ」

「親友！ いいなあ。どんな人なんですか？」





「作業に戻るよ。休みすぎた」

僕は席を立った。

「私も食器を片づけますね」

「うん、ありがとう」

外へ出ると、雲一つない星空が見えた。  
思わず見入ってしまうほどの景色で、ぼうっと眺めている  
と視界を横切るものがあった。

「マリー、来て」

小屋へ戻り、マリーを呼んだ。  
ちょうど食器を洗い終えたようだった。

「なんですか？」

「空、見てて」

二人で空を見上げると、ひとつ、またひとつと流れ星が空  
を駆けていく。

「もしかして、流星群？」

「きっとそう、だよね」

「流れ星がこんなにたくさん……」

「きれいだ」

「はい」







「お願いごとはしなくていいの？」

「そうですね。じゃあ……もっとスマレの絵が見れますように」

「なにそれ」

それから、僕たちの間にやわらかな沈黙が流れた。

二人で流星群を眺めているとマリーが、くしゅん、とくしゃみをした。

夜風で体が冷えたのだろう。

「もう小屋へ戻りなよ」

「……はい、そうですね。流星群のこと、教えてくれてありがとうございました」

「君はいつも丁寧だね」

「そうですか？」

「うん、いいや。風邪ひかないようにね」

「はい、スマレも無理しないでくださいね」

「わかってるよ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

そうして、僕は夜通しで作業を進めたのだった。

